

石田 浩

## 『中国農村経済の基礎構造』

—上海近郊農村の工業化と近代化のあゆみ—

晃洋書房 1933.2 x+229 ページ

本書は上海市近郊の農村調査をもとに、「唐家村」という特定の村(かつての生産大隊、現在の行政村)を例に、民国期からはじまる経済的社会的な変化と不変の構造を明らかにしようとしたものである。その場合の問題意識は「社会主義中国の研究において、解放前の歴史的視点から中国の社会・経済を把握するといった方法論が欠如し」(1ページ)ているとの認識のもと、中国社会主義の根幹である農村経済の基礎構造を人民共和国以前、および以後の諸改革を通じてトータルに理解し、「伝統社会が中国社会主義をどのように規定してきたのか」(2ページ)を説明することにある。著者が88、89年に行った調査は県、郷、村レベルにおける文献・統計資料の収集、郷村幹部および村民に対するヒヤリング、さらに6自然村220世帯を対象とする農家調査を内容とするが、個別農家調査については集計にかかわる時間的制約から、本書では利用できなかったという。

中国の農村を対象とするモノグラフ的な研究としては、日本に限定しても上田信「村に作用する磁力について—浙江省勤県郵勇村(鳳溪村)の履歴」(『中国研究月報』第40巻第1、2号、1986年)、中生勝美『中国村落の権力構造と社会変化』(アジア政経学会、1990年)、橋本満、李小慧「山東省小高家村」(橋本満、深尾葉子編『現代中国の底流—痛みの中の近代化』行路社、1990年)、聶莉莉『劉堡』(東京大学出版会、1992年)、評者による『山東省武城県農村調査報告』(東京大学社会科学研究所調査報告・第26集、1993年)、それに三谷孝編『農民が語る中国現代史』(内山書店、1993年)など、文化人類学、社会学、および農業経済学などの分野のものがすでに公刊されている。

これらと比較した本書の特徴は、1つの行政村(上海市奉賢県青村郷唐家村)における社会経済構造の変化を時系列的かつトータルにあとづけた点にある。すなわち第1章の「唐家村の社会経済概況」、第2章「解放前の社会経済構造(1949年以前)」にはじまり、第8章までの前半は、経営形態や行政的枠組みにか

かわる制度の形成、内容が、オーソドックスな時期区分にしたがい、県志・郷志および文書資料(档案)、それに幹部・農民に対するヒヤリングにもとづき記述されている。これに対し後半はテーマ別の分析で、以上に加え郷村レベルの統計資料にも依拠し、「農村の工業化と産業構造の変化」、「農業生産力の変化と農業機械化の進展」、「農村財政と郷村建設」、「農村社会生活の変化」、「1988年度唐家村経済の分析」の章別構成で記述されている。このうち「農村社会生活の変化」の章では、いずれも現地で提供された所得統計、農家経済統計(11世帯のサンプル調査)、住宅統計、教育統計にもとづく分析が行われている。

このように本書の内容は多岐にわたり、かつ県郷村の各レベルから収集した図表、ヒヤリングを整理した表が合計51枚加わるなど、膨大なものである。ここでは逐一その内容を紹介する余裕はないが、いわば終章にあたる第14章の「唐家村の工業化と近代化のあゆみ」の部分を手がかりに、本書の内容を検討してみよう。

終章では、冒頭で示したような農村調査を行うにあたっての著者の問題意識が再度表明され、それにもとづき以上の歴史・現状にかかわる分析の総括が行われている。すなわち著者の総括によれば、「社会主義改造や社会主義建設過程の中で、自然村は形態的にも存続し」、「自然村内における社会関係は解放前より強化されたと考えられ」(216ページ)、村の経済発展を支える村営工業も「村落内の人間関係のネットワークを通じて設立され、原料入手や技術導入も全て人的チャンネルに基づいている」(219ページ)。そして「上海という比較的好条件に恵まれた本村では、郷鎮企業創設のチャンスが多く、1980年代前半に工業は急速に発展した。…しかし(村の企業)としての古い企業体質が経営の非合理を生み、近年の競争激化の中で、その利潤は減少している。…農村工業を発展させることで農村内の産業構造を変化させ、農村の過剰労働力を郷鎮企業に吸収し、農家経済を発展させてきた経済改革は、本村においてはすでに頭打ちとなっている」(220ページ)という。この地域の場合、農業経営の個別化という制度改革は生産力発展にほとんど寄与しなかったという重大な事実の指摘が記述の背後にあるが、それはともかく、「村内の人間関係」に依存した農村経済発展、すなわち「内発的発展の契機がすでに限界に達していることから」、さしあたり「外部からの投資機会を待つしかな」く、他方で今後の政策として「村

内の人間関係を強化するのか、それとも新たな社会的集団原理に組み直すことが可能であるのか」が問われている、と著者は結論づける。そして「これまでがそうであったように、前者(村内の人間関係の強化—引用者)が最も安易であり、これからも伝統的人間関係を通じた経済的発展(金づる探し)が模索されるであろう」(以上 220 ページ)として本書を結んでいる。

このように本書の結論部分は「村内の人間関係」の問題に収れんされているが、内容的には以上の目次で明らかのように、本書全体としてはるかに多岐にわたり、かつ豊富である。そして多岐にわたる内容から上記の結論にもってくる議論の仕方は、いささか性急であり、かつ豊富な内容を矮小化するものであるとの印象を評者をもつ。そもそも「村内の人間関係」とはいかなる内容をもち、社会関係が強化されたという場合に何をもち、測定されるのであろうか。ある場合には、ネットワーク型の人のつながり一般を指す言葉として「村内の人間関係」が使われ、他方で「村内の人間関係(村の団体性)」という言葉の言い換えが著者によってなされているが(220 ページ)、村の集団的組織的枠組みを指すと思われる「村の団体性」と「村内の人間関係」を同義と置くことが適当であろうか。

本書を通じ著者がもっとも強調する点は、さまざまな制度変化が従来の自然村およびそれらを統合する行政村をユニットとして起きたことである。日本では「人民公社の解体」といった言葉が流布され、あたかも従来の人民公社—生産大隊—生産隊という枠組みが跡形もなくなったかのような議論がなされているが、集団化前後の過程も含め、自然村→互助組→生産隊→村民小組、行政村→高級合作社→生産大隊→村民委員会(行政村)、郷→人民公社→郷という形での枠組みの連続性が著者によって実証されており、本書の大きな功績といってよい。そして郷鎮企業といったものが人民公社時代の「社隊企業」をルーツとし、他方で今日においても郷村の行政機能と経済機能が不可分であること、すなわち実態として人民公社時代の「政社合一」が続いていることも示されており、同様に本書のメリットと考えられる。

こうした「村の団体性」が、一般的な意味での「村内の人間関係」と相互規定的な関係にあることは確実であるが、たとえば行政機能や経済機能のレベルで「村の団体性」を考えた場合、そこには「人間関係」には解消できない次元の問題が含まれることも

明白である。行政機能についていえば、何らかの形で末端の行政機構が政策当局によって必要とされ、既存の枠組みを利用することが政治的コストからみて安価であったと消極的に評価することも可能であろう。集落としての自然村は民国以前より存在し続けており、かつては保甲制という形で行政機構の末端に位置づけられた。土地改革や農業集団化・人民公社化が自然村や行政村に依拠してなされたということは、集落の集落たるゆえんやその歴史性を考えれば、むしろ当然であろう。その意味で民国時代の集落機能や、そのもとの「村内の人間関係」についての分析が不可欠であったが、この点の説明は手薄である。

他方郷村レベルの経済機能についていえば、個別農家レベルに比べて、分業・協業のメリット、規模・範囲の経済性が存在するはずであると一般的に指摘できる。同時に組織化に伴うコスト・不経済も存在することになるが、改革前の中国農村にあっては市場と組織の代替性が乏しく、かつ集団経済以外の個別的な経済活動は大きく規制されていたわけであるから、農業・非農業の分野で経済的機会を求める場合には、好むと好まざるにかかわらず集団農業や社隊企業に取り組みざるをえなかった。また市場は未発達もしくは規制されていたのであるから、スポット的な市場取引関係ではなく人間関係のネットワークや人的チャネルにもとづく経済関係が支配的になることは、一面で当然である。さらに、改革・開放前に上海近郊や江蘇省南部の地域において社隊企業が展開していたことはよく知られており、すでに存在し一定の規模に達していたという意味で、これらの企業が改革・開放後においても引き続き経済発展の担い手であり続けるということは理解できる。

以上から明らかのように、「村内の人間関係」から伝統村落や社会関係の存続を説明する著者の議論に対し、自然村・行政村をユニットとする集団的組織的枠組みに経済的・政治的な合理性を一定程度認め、そこから「村内の人間関係」を説くことも可能なのである。いずれにせよ著者の議論を説得的に展開しようとするならば、民国期から共和国期、土地改革・集団化から改革・開放の今日に至る時期における「村内の人間関係」の内実そのものを、個別農家のレベルから示す必要がある。

こうした点に鑑み、著者らによって同時に 220 世帯にも及ぶ個別農家の調査が行われたにもかかわらず

ず、その成果が本書に基本的に生かされていないのは、何とも理解に苦しむ。このため著者自身の「村内の人間関係」に対する分析も、実際には制度的枠組みの時系列的な解説、もしくは分野別分析の中で、関連するヒヤリング・データを紹介するという消極的なレベルにとどまっている。

評者の乏しい経験によれば、部分的なデータから村の社会経済構造を再構成する作業は、あたかもジグソー・パズルを埋めるような根気のいる仕事であるが、著者は文献資料と、おそらくは内部資料であるマイクロレベルの統計データを入手することにより、あっさりこの壁を突破し、かつ詳細なヒヤリング・データにもとづきこれを解説してみせた。本書の大きなメリットではあるが、逆に本題であるはずの「村内の人間関係」が十分に伝わってこないのはいかがなことが、個票の中身については不詳であるが、著者みずから行った個別農家調査の集計結果が利用できれば、記述はより立体的にして説得力をもったであろうと惜しまれる。

さて「村内の人間関係」はともかくとして、「村の団体性」の議論は中国のみならずアジアの農業・農村問題に通じる論点を提供していると考えられる。比較の視点にたてば、市場化が進む非農業的な経済活動において将来にわたり村が担い手であり続けることは考えにくい、農業および関連分野における個別経営を補完する集団的もしくは地域的な枠組みについては、その必要性がいわれて久しい。とりわけ他の東アジア諸国・地域においては、土地改良や機械利用、技術普及、農産物販売のユニットとして、また転作や団地的土地利用のユニットとして自然村やそれらを統合する行政村が政策的に注目・利用されてきた。長らく「封建遺制」とされてきた村落共同体が、むしろ肯定的に評価される傾向すらあるのである。かかる主張や現状については、当該分野における組織・情報・インセンティブの構造に即して、その当否が理論的に詰められるべきであり、実際にそうした作業は行われている。本書においては、かかる国際比較や経済理論的な視点が希薄であるとの印象をもつ。

個別農家の調査票を含む膨大な資料が収集されたことは、後世に残る著者らの貴重な仕事であると評者は考える。しかし冒頭でみたように、類似の調査はすでいくつか行われており、調査にかかわるコスト・ベネフィット、フィージビリティを秤量の上、いかなる方法論・仮説にもとづき中国というフ

ィールドで実態調査を行うのか、改めて議論されるべき段階にきていると思われる。

なお最後に気になった点を2点指摘しておく。

まず第1に、農村問題がメインテーマであるにもかかわらず、耕種農業以外の広義農業について基本的に言及されていないのはなぜであろうか。上海近郊の経済発展に伴い、農家経済にあっては兼業化のみならず野菜、畜産、それに酪農などの施設利用型農業への転換が常識的に予想される。

第2に、本書では世帯を基本的に番号で示しているが、調査対象地域は実名で、登場する個人の特定も可能であろう。たとえば冒頭に示した聶莉莉『劉堡』の場合には、地名・人名はすべて仮名とされ、プライバシーの保護には細心の注意が払われている。マイクロレベルの調査を行う場合には個人情報保護が最低限の倫理として要求されると思われるが、いかがなものか。

[田島俊雄]